

修復的対話を終えて

記入者：A高等学校 担任教師B

【対象生徒の実態】 * いずれもBの担任するクラスの生徒。

○男子生徒F

- ・ 中学校時代に教員との関係づくりが上手くいかず、新しく関わる教員に対して不信感をもつ傾向がある。
- ・ 斜視があり、書字に特徴あり。学習面や生活面（特に提出物）において課題がある。それにより、教員から「怠けている」「やる気がない」と誤解をされてしまいがちで、受けた指導に対して納得がいかず、保護者経由で学校にクレームが入ることがあった。
- ・ 担任が定期的に話を聴く時間を設けるようにした。自分が誤解されてしまったことや、考えを相手に伝えても理解してもらえなかったことで、不満が溜まっていることが多いということがわかった。そこで本生徒は、今まで大人たちに話をしっかりと聴いて受け止めてもらえる機会があまりなかったことがわかった。
- ・ 今年度スクールカウンセラーとの対話に複数回参加。回数を重ねるごとに、カウンセラーに悩みを打ち明けることができるようになってきた。

○男子生徒G

- ・ 多動傾向があり、落ち着きがない。遅刻や欠席の多さが目立つ。
- ・ 家庭環境に問題があり、一人の時間が多く、話を聞いてもらえずに1人で悩んでしまうことが多い。
- ・ こだわりが強く、納得できないと指導を受け入れることができない。
- ・ 本人なりには努力をしていますが、周りからは誤解をされることが多く、指導を受けることが多い。
- ・ 担任が定期的に面談の時間を設けたところ、自分の考えをひたすら話すことで考えをまとめて、自分なりに納得できる筋道を立てることができる傾向があることがわかった。

→以上の経緯により、この2名の生徒が今回の修復的対話に参加する運びとなった。

【当日の対話の様子】

- ・ 当初は緊張した様子ではあったが、「生徒2名に対して多くの大人が時間を自分たちのために使って、話を聴いてくれる」ということに対して、生徒たちは非常に嬉しそうであり、非常に前向きに参加している様子であった。また、1名のみでなく2名、互いに面識のある生徒同士で参加したことで、緊張を和らげることができたのではないかと思う。

- ・ 2名の生徒は共に、日頃「大人に自分の考えを聞き入れてもらえない」「自分たちを認めてもらえない」という不満が多い傾向がある。そのため、普段はあまり見ないくらい落ち着いており、しっかりと自分の考えを素直に表出することができているように思えた。
- ・ 対話終了後に生徒からは、「普段あまり聞かない先生たちの考えを知ることができて嬉しかった」「自分の考えを聞いてもらうことができてよかった」という感想が上がった。

【対話終了後の様子】

- ・ いずれの生徒も、以前は特に朝の登校時の表情があまりよくなかったのだが、対話を実施した翌日は朝から表情がよかったように思える。
- ・ 対話をしてみてどうだったか、本人たちに聞いてみたところ、「参加をする前は緊張したが、勇気を出して参加をしてよかった」「友達が普段考えていることを知ることもできて、いい時間だった」という感想が上がった。
- ・ 特に生徒Gについては、周りの生徒に自分から声をかける場面が増えたように思える。困っている生徒や、体調不良が続いている生徒に対して、「自分は夜寝る時間をこうしたら改善できた」などアドバイスをしてあげる場面も見受けられた。